

今日もこれから12時間ほどのハードワークか。

森川芽衣は職場に向かう車の中で、ふとため息をつく。

職場は自宅から車で20分程度の総合病院、芽衣は病棟の看護師なのだ。

職場環境も一般的なレベルで、ブラックという程のものではないし、給料も相応に貰っている。

不満が有るわけではない。ただ、病人を相手の日々のハードワークはやはり辛いものがある。

508号室のおじいちゃんは、夜中に寝ていて奇声を上げるし、513号室のおばあちゃんは、脚を骨折して動けないのに、無理して起きようとして転んばかりいる。

たぶん、ちよつと認知症も入っているんだろう。

バイクの事故や仕事での転倒や、芽衣の担当の外科病棟はあれこれと手がかかる患者さんが多い。

まあ内科で点滴と酸素が繋がれて、いつ亡くなるか判らない患者さんを看てるよりは、骨が折れたとか皮膚を縫い合わせたの方が、いずれは回復して退院すると思えば、気は楽かもしれない。

芽衣のため息には、もうひとつの理由があった。

勤務中、病棟内を忙しく動き回っていると、休憩時間など勤務規定には有っても、実際には無いに等しい。

お昼を食べようとしても、ナースコールが鳴れば対応しなければならぬし、トイレに行きたくても、患者さんを相手にしていれば、自分の便意など後回しになってしまう。

そのためここ数日お通じが無く、下腹部に不快な感覚が生じているのだ。

部屋に帰れば自由な時間は有るのだから、そういう時にゆっくりトイレに入れば良いのだろうけれど、帰ってシャワーを浴びて食事をすれば、すぐにでも眠くなってしまう。

そういうタイミングでは便意も無いので、のんびりとトイレで頑張るよりもベッドに転がりたくなってしまう、そのまま朝になってしまう。

朝は出勤時間ギリギリまで眠ってしまい、出かける仕度をして食パン一枚くらいの朝食を摂って、職場に向かう。

やはり、ゆつくりトイレに籠る時間など無いのだ。

それにこの仕事では、ローテーションで数日に一度、夜勤がある。

生活時間を無理やりに変えて、夜中に活動すれば、体のリズムも狂ってしまう。

食事はお腹が空けばいつでもどこでも食べられるが、トイレでの排泄は体のタイミングに合わせて、ある程度の時間が必要だ。

こうやって、少しずつ身体に無理を重ねながら、仕事を続けていくんだ。

でも医師の勤務を見ていると、看護師よりも、もっとハードな仕事をしている。

医師が過労死したら、本末転倒だろう。こういうのって「紺屋の白袴」って言うんだっけ。

そんなとりとめもない事を考えながら、芽衣は職場に向けて車を走らせた。

芽衣の今日の勤務は遅番だ。

これは朝の8時半に出勤して、夜勤が来る22時までの勤務で、夜勤は21時半に出勤して引き継ぎをして、朝の6時半まで。早番は6時に来て17時には勤務終了となっている。

遅番が一番長く、途中で休憩をとるとというのが建前だが、実際には食事さえまともに摂れない事もあるのだから、そんな休憩が出来るはずもない。

出勤してロッカールームで白衣に着替えると、さっそくフル回転の仕事が始まる。

早番から状況を聴き、夜勤の書き残した引き継ぎ書に目を通し、患者さんの朝食の様子を観察し、薬の飲み忘れをチェックし、それぞれの患者さんの主治医の回診の予定を確認し、患者さんのナーズコールに対応し、やることは山のように有る。

気付くと、もう12時を回っている。同僚の由香が昼食に誘ってくれる。

お腹の調子が良くないのであまり食欲も無いのだが、時間が有るときに食べておかなければ、夜勤が来るまでにエネルギー切れになってしまう。

二人でロッカールームのテーブルの上で、それぞれのお弁当を拵げた。

由香のお弁当は自宅で作って持参したものだ、芽衣のは院内の売店で買ったコンビニ弁当だ。

「どうしたの。今日はあんまり食欲が無いみたいね。」

「うん、ちよつとね。お腹の調子が良くないの。」

「そうか、下してるの、詰まってるの、どつち。」

「詰まってる方。」

「そうだね。こんな仕事してると、ゆつくりトイレにも入ってられないものね。私も独身の頃は、けつこう便秘になったよ。」

そう笑う由香は、芽衣と同じ歳だが昨年結婚して、今は旦那さんと二人暮らしだ。

お弁当も、旦那さんの分を作るついでに自分の分も作っているという。

一人分でも二人分でも、作る手間は変わらないからと、毎日弁当持参だ。

「由香ちゃんもそうなの。そんな時はどうしてたの。」

「そうね。一番簡単なのはアレよ。」

そう言つて由香が指さしたのは、ロッカールームの隅にある備品棚だ。

外科病棟なので、包帯やギブス用の添え木、松葉杖など、あれこれと備品が入っている。

「アレって?」

「その、下から二段目の一番右に入ってるやつ。」

そこには、小さめの段ボール箱に山積みにされたディスプレイポタイプの浣腸が有った。

「浣腸?」

「そうよ。それが一番簡単で即効性がある、お・く・す・り。」

「でも・・・」

「なに? 使ったことないの? 看護婦なのに。」

「患者さんにしたことはあるわよ。でも、自分では・・・」

「自分でしたことないの？ 誰かにされたとかは？」

「自分でしたことも、されたこともないわよ。」

「私なんか独身の頃は、ちよつと困ったらここから一つ頂いて自分でしたわよ。」

「ここから貰っちゃうの？ 病院の備品なのに。」

「大丈夫。 消耗品だし、在庫とか使用数とか管理してないから。 私も先輩に教わって使い始めたの。 まあ、毎日使うわけじゃないし、せいぜい月に一度くらいだからね。」

「独身の頃って言ったよね。 今は大丈夫なの？」

「今はね…」

言いかけて、なぜか由香は口ごもる。

芽衣は面白くなって、ちよつと追及してみる。

「旦那さんといっぱいエッチしてるから、お腹も順調なのかな？」

「そんなことないわよ。 セックスと便秘は別の話。」

「じゃあ今も便秘するのね。 でも、この浣腸は使ってないの？」

「あのね。」

ちよつと赤くなった表情で由香が言う。

「便秘した時には、旦那が浣腸してくれるの。」

「ええつ、旦那さんにしてもらってるの？」

「そうなの。 最初は何気なく便秘の話をしたんだけど、病院の浣腸を使ってたって言ったたら、そんなことしちゃダメだって叱られて、イチジク浣腸を買ってきてくれたの。」

「優しい旦那さんね。」

「でも、買ってきたものを自分で使おうとしたら、旦那が『僕がやってあげる』って言って…」

「それで、素直にされちゃったの？」

「恥ずかしいから嫌だって言ったんだけどね。 強引に押し倒されて、お尻をむき出しにされて、入れられちゃったの。」

「はいはい、ご馳走様。セックスでも浣腸でも、好きにしてね。それからだって、何度も浣腸されてるんでしょ。」

「そうね、最初はそんなだったけど、一度されたら二度目からは抵抗もしないようになってっちゃった。旦那も私に浣腸して愉しんでるみたいだし、私も便秘解消になるしね。」

「新婚の二人で楽しんでるのね。」

「うらやましい?。」

「まあ、結婚生活はね。浣腸されるのは、ちよつと考えちゃうけどね。」

「まあ、私の話はいいわ。芽衣は患者さんにしたことがあっても、自分でしたことないんなら、最初は難しいかな? 私がしてあげようか?。」

「ええつ、でも…。」

「今じゃないわよ。勤務時間が終わってからね。」

ちよつどその時、ポケットのナースコールが鳴った。

由香は、PHSでコール内容を確認すると、芽衣を制して、立ち上がる。

「私に対応するから大丈夫。あなたはしつかりお昼を食べてね。遅番なんですよ。」

ロッカールームに一人残され、食べかけのお弁当を口に運びながら、さっきの由香との会話を思い出す。

ちらちらと備品棚の方を眺めると、今までは何とも思っていなかったディスプレイタイプの浣腸も、自分のお尻の穴に挿入するシーンを想像してしまい、なんだか恥ずかしく感じてしまう。

昼食後も忙しい時間は続く。

診察などが無くベッドで寝ているだけの患者さんでも、あれこれと看護師にお願いすることも多い。

骨折などで動けない患者さんでは、トイレにさえ行けない者も居る。差し込み便器や尿瓶などは、頻繁に登場するし、排便が数日無い患者さんに浣腸することも日常の業務のひとつだ。

だが、由香との会話で一度浣腸の事を意識してしまうと、

なんだか患者さんに浣腸をするのさえ恥ずかしいように思えてしまう。

その日の午後の勤務も無事に終了した。

患者さんの夕食が済めば、後は夜勤に引継ぎをする準備となる。

患者さんも、消灯までの間はテレビを観たり、スマホをいじったりとリラックスした時間を過ごす人も多い。

早番勤務の者は、帰路に向かう。由香も早番だったので私服に着替え、あつさりと帰って行った。

昼食の時の芽衣との話など、すっかり忘れていようだ。

この後、由香に浣腸されるのかも、と、期待と不安が入り混じった複雑な気分で、午後の勤務をこなしていた芽衣にしてみれば、期待外れのような、安心したような複雑な気分だった。

今日の夜勤の担当は、男性の看護師の関谷祐一だ。

年齢は芽衣より若い、しっかりしていて患者さんにも評判が良い。

業務内容の引継ぎをして、芽衣も帰り支度にロッカールームに向かった。

私服に着替え、バッグを肩に掛けてから、ちよつとためらった。

午後もゆつくりトイレに入るほどの余裕は無く、お腹の不快感は、ますます酷くなっている。

由香の言ったように、この浣腸をひとつ頂いて、部屋に帰って自分でもやろうかと考えて、隅の棚のディスプレイを手に取る。

それをバッグに入れようとしながら、振り向いた瞬間だった。

ロッカールームのドアが開き、関谷が入って来た。

「あれ、森川さん。まだ居たんですね。」

このロッカールームは、男女兼用で医師も看護師も使っている。

もつとも医師がナースステーションのロッカールームを使うことはほとんど無いので、ほぼ看護師用となっている。

昔なら女性の看護婦ばかりだったから普通にここで着替えをしていて、男性医師などはきちんとノ

ツクをしてから入っていたが、男性の看護師が入るようになってからは、ドアに「着替え中」という表示が掛けられるようになった。

もつとも、女性の看護師でもTシャツ姿の上にワンピースタイプの白衣を着て、その後で私服のスカートやパンツを下ろすなどして、着替え姿を見られても困らないようにしている者も多いので、あまり札が出されることもなく男性も気にせずに入ってくるのが普通だった。

芽衣も普段はそうやって着替えていたので、誰か男性が入ってきてきても気にもしなかったのだが、今回はタイミングが悪すぎた。

「あれ、それは浣腸？ 誰か患者さんに浣腸する指示が出てたんですか？」

「ああ、これは違うの。えつとねえ・・・」

芽衣はどきまぎして口ごもる。

「患者さんへの浣腸なら、僕がやっておきますよ。」

基本的には、女性患者さんには、羞恥に配慮して女性看護師が浣腸することになっている。

男性患者に対しては、男女どちらでも対応する。

でも、それはあくまでも基本的な話で、看護師の手が空いてなかったり、夜勤時間で担当者が少なかったりする時には、男性看護師が処置することも普通にある。

「そうじゃなくてね・・・」

どうやって、この状況を誤魔化そうかと、芽衣は頭をひねった。

浣腸を手にとっていけば、患者さんにそれを使うのは自然な流れだ。

芽衣が便秘で、浣腸をしようとしたなどと、関谷に知られるのは恥ずかしい。

それだけではない。自分の便秘解消のために、病院のものを使うのは、早く言えば使い込みだ。

この状況の緊張感で、芽衣の手からは汗がにじんでくる。

そして腹部も緊張に連れて、引き攣るような感覚が強くなってくる。

やがてそれは鋭い痛みになり、芽衣は腹を押さえてしやがみ込んでしまう。

関谷は芽衣を気づかかって、抱き起そうと手を伸ばす。

「大丈夫ですか？ 具合が悪いんですか？」

「お腹が痛いのに。」

関谷に抱えられて、椅子に座りながら、芽衣は告げる。

「先生を呼んできましようか？」

「ううん、診察は要らない。原因は解つてるから。」

その答えに、関谷も何か察したようだった。

手に浣腸を持ち腹痛を訴えていれば、答えは簡単だろう。

「便秘なんですか？」

恥ずかしさをこらえて、芽衣は頷く。

関谷も芽衣の隣の椅子に腰かけ、うつむき気味の芽衣を覗き込むようにしながら話しかける。

「じゃあ、森川さんは自分で使おうと思つて、それを持って帰るつもりだったんですね。」

芽衣は、恥ずかしさと気まずさとお腹の痛みで、半べそ状態になつて頷く。

「今までもそうやって病院の備品の浣腸を持ち帰つてたんですね？」

「違うわ。今日が初めてなの。お昼に便秘の話をしてたら、これを使えばいいつて。」

「誰かに言われたんですね？」

「まあ、浣腸なんて消耗品のようなものだからね。あんまりうるさいことは言わなくても良いでしょう。」

関谷も、芽衣の行為を責めるつもりは無いようだ。

「それよりも、そんなに腹部に痛みがある状態で、帰宅出来るんですね？」

「だって、帰らなきゃ・・・」

「ここで処置していったらどうです？」

「でも、患者さんにやったことはあるけど、自分でやるのは初めてなの。部屋で落ち着いてやらないと失敗しそうで・・・」

「じゃあ、僕が処置してあげましようか？」

「ええつ、関谷君が。」

「僕だって看護師ですからね。患者さんに浣腸するなんて日常業務です。痛かったり苦しかったりしてる人を、そのまま放置するのは、職業倫理に反しますよ。」

「そんな。関谷くんに浣腸してもらうなんて…」

「やっぱり毎日顔を合わせている同僚じゃ、恥ずかしいですか？でも、これは医療行為ですよ。森川さんだって、普通に患者さんに浣腸してるでしょう。」

「それはそうだけど。」

「婦人科の病気になれば、医者に陰部を診てもらおう。消化器系なら腸カメラを入れられる。普通の事ですよ。結婚して子供が出来たら、この病院で産みますよね。産科のドクターもみんな顔見知りでしょう。」

そんなふうに言われてしまえば、関谷の提案を拒むことも出来ない。

関谷に頼らず自分で浣腸するか、関谷にお願いするかのどちらかしか方法は無さそうだった。自分でするとしたら、どこで、どうやってやろう？

トイレに入って自分で浣腸するのは、難しそうな気がする。

「この時間帯なら、処置室は誰も居ませんよ。あそこで横になって処置をした方が良いんじゃないですか。」

病棟のナースステーションとロッカールームの間には、簡単な処置の為の部屋が有る。

昼間は入院患者の包帯の交換などの簡単な処置を行う場所だ。

もちろん、便秘になった患者への浣腸などの処置も行う場合もある。

本当にベッドから降りられない者はベッド上での処置だが、松葉杖や車椅子などで動ける患者は、プライバシーや羞恥に配慮してその部屋での処置となることも多い。

「痛みで立ち上がるのもつらいんでしょう？早く処置した方が良いですよ。」

関谷に重ねて促され、芽衣はためらいながらも、その提案を受ける方に、気持ちが悪く傾いて行く。

「じゃあ、してもらおうかな…でも、やっぱり恥ずかしい。」

「そんな事言ってる場合ですか。」

「誰かに知られないかな？ 私が処置室で浣腸されてるなんて。」

「入って行くところを見られなきゃ、大丈夫ですよ。使用中の札を出しておけば、誰も入ってきませんから。」

処置室の使用は、そういうルールになっている。

関谷がロッカールームのドアを少し開けて、外の様子を伺う。

「今なら誰も居ないから行きましょう。」

そう言つて、芽衣を促す。

芽衣は関谷に支えられるようにして、素早くロッカールームから出て逃げ込むように処置室に入る。関谷はドアに使用中の札を出し、芽衣の後から処置室に滑り込む。

まるで何か悪いことでもしているみたいだと、こんな状況なのに、ちよつとおかしくなってくる。

関谷は芽衣をベッドに横にさせると、身体の左側を下にして「く」の字のように曲げさせる。

芽衣も浣腸の体位と知っているから、抵抗もせずその形になる。

ここまでされて、これから本当に浣腸をされるのだという思いが、改めて芽衣の心を波立たせる。

関谷は、そんな芽衣の思いを気づかぬように、事務的な表情で処置を宣告する。

「じゃあ、これから浣腸をします。解つていると思いますが、便意が来てもすぐに出してしまつと、薬だけが出て便秘が解消しませんから、できるだけ我慢してくださいね。」

「解つてるわよ。毎回患者さんに言つてるんだから。」

芽衣は恥ずかしさと照れくささを誤魔化すように、わざと明るい声で答える。

芽衣がバッグに忍ばせたのは、120ccのロングノズルタイプのデイスポ浣腸だ。

それを関谷が手にして、芽衣に告げる。

「じゃあ、お尻を出しますよ。」

芽衣のパンツの、お腹の部分のボタンとホックを外させ、そつと太腿まで下げ、中のショーツも同じように、肛門が出るところまで下げる。

ロングノズルの先端に潤滑剤のワセリンを塗り、芽衣の右臀部を優しく持ち上げ、肛門をむき出し

にする。

芽衣は患者として、処置をやり易いように協力的に体位を動かす。

そして、その瞬間に気付いてしまう。

自分が患者さんにする時には、肛門のすぐ近くの陰部も見えているという事を。

おそらく、関谷の眼にも、芽衣の陰部が映っているだろう。

肛門を開かれ、浣腸されるのに加え、もう一つの秘部も見られるという、二重の羞恥に気付き、芽

衣の頬は紅潮する。

関谷は、そんな芽衣の思いには関係なく、システマティックに処置を進める。

ノズルをゆつくりと肛門に挿入して、その具合を確かめている。

「痛くはないですか？」

「うん。大丈夫。」

腸壁を傷つけないように確認をしているだけなのだが、そのやりとりさえ、芽衣にしてみればなんだけか恥ずかしい。

「じゃあ、液を入れますね。」

そう言うと、浣腸の胴の部分をつくりと押しつぶし、その中の液を、芽衣の中に注入していく。

関谷にしても、芽衣の事を思つて、冷静に事務的に処置を進めているが、内心は穏やかではいられない。

日頃顔を合わせている同僚の若い女性に浣腸の処置をしているのだ。

肛門も陰部も見える状態で、肛門にノズルを突き立て、浣腸液を流し込んでいると思うと、思わ

ず、もつとお尻を触りたい、陰部の方にも手を伸ばしたい、アソコに指を挿入してみたい、そんな考えさえ湧いてきてしまう。

もちろん看護師の倫理として、そんな事は絶対に出来ないのだが、一人の女性としての芽衣は、関谷にとつても、そういう考えを抱かせる魅力的な存在なのだ。

芽衣は初めての浣腸に動揺していた。

肛門からノズルが入って来る違和感は、想像していたものとあまり違いはなく、もちろんムズムズと不快ではあったが、想定内だった。

しかし液を注入されはじめると、自分の腸の中に液が流れ込む感触がしっかりと感じられ、不安は大きくなった。

関谷がゆつくりと液を注入している最中から、腸の中が膨れ上がるような感覚で、まだグリセリンの影響など出ないはずなのに、軽い便意を感じ始めた。

やがて、すべての液が芽衣の体内に注入され、関谷はゆつくりとノズルを肛門から引き抜いた。

「はい、入れ終わりました。すぐトイレに行っちゃうと我慢できなくなりますから、ここで横になったままでギリギリまで我慢しましょうね。」

芽衣は素直に頷く。

関谷は芽衣のショーツとパンツを元のよう上げて、芽衣の目の前に砂時計を置いた。

「我慢してる時間の目安に、これを置いておきますね。目安ですから、これが落ちきる前にトイレに行っても良いですし、これが落ちきってからでも、我慢が出来るようでしたら限界になるまで頑張ってみてください。」

もちろん、そんな事は芽衣も承知している。トイレは、処置室から廊下を挟んだ向かい側だ。限界まで我慢してからでも間に合う処にある。

関谷は使用済みの浣腸をゴミ箱に捨てると、芽衣の頭の辺りにある椅子に腰を下ろす。

トイレに行くまで、付き添ってくれるつもりなのだろう。

「良いの、仕事に戻らなくて？」

「大丈夫ですよ。消灯後の今頃は、まだみんな眠れずにあれこれしてますから、看護師はうろうろしない方が良いですよ。それに、なにかあればコールが来ますから。」

「そうね。容態が急変するような患者さんが居るわけじゃないものね。」

そんな会話をしながらも、芽衣の腸の中では次第に便意が大きくなって来ている。

でも、まだ大丈夫、我慢出来る。砂時計も、まだ半分くらいしか落ちていない。

芽衣はそう思っていた。

「女の人は、体のリズムもあるから、便秘しやすいって聞くけど、やっぱりそうなのかな？」
緊張した雰囲気をやわらげようとしているのか、関谷はさりげなくそんな話をしてくる。

「そうね。こんな仕事をしてるとトイレに行けなくらい忙しいってのもあるんだけどね。」
芽衣も、便意を忘れるように普通に答える。

「関谷くんは、便秘とかしないの？」

「そうですね、一日や二日出なくても、自然に出ますよ。どちらかと言えば、お酒を飲んだ次の日なんかは、下痢っぽくなる方が多いかな。」

「良く飲むの？」

「そんなに飲まないですよ。休みの前の日くらいかな。」

「でも、お酒が強そうな雰囲気だよ。」

「まあ、飲み始めると沢山飲むんですけどね。」

「どのくらい飲むの。」

「そうですね、ボトル半分くらいかな。」

「それじゃ、下痢もするわね。」

そんなさりげない会話の最中にも、便意は強くなってくる。

砂時計も、もう全部落ちきってしまった。もう我慢も限界に近い。

トイレに行こうと思い、起き上がろうとすると、便意の波が急激に強くなる。

ベッドから降りようとするが、肛門が開いてしまいそうで身動きが出来なくなってしまうている。

「どうしよう。トイレまで行けそうもない。漏れちゃいそう。」

「大変だ。我慢しすぎちゃったかな。」

「どうしたらいいの？」

「仕方ない。これを使いますか。」

関谷は、部屋の戸棚に入っている差し込み便器を持ち出す。

「ええっ。ここですか？ ヤダッ、恥ずかしいよ。」

「そんな事、言ってる場合じゃないでしょう。起き上がれないんじゃないですか？」

「でも…」

「抱っこして連れてくわけにもいかないでしょう。」

「抱っこされたら、そのまま漏れちゃいそうだけど…」

「このままで、ベッドの上で、パンツの中にお漏らしするつもりですか？」

「それもやだ。」

「じゃあ、やっぱりこれしかないですね。」

芽衣は、一瞬を争うほどに便意が強くなっている。

もう、恥ずかしいなどと言っていられない状況だ。

関谷もそれを察知して、芽衣のパンツとショーツを足首まで下ろし、仰向けに体位を替えさせ、脚を開かせると、お尻の下に差し込み便器を当てがった。

「やだ、恥ずかしい。見ないで。」

芽衣は顔を手で隠し抵抗しようとするが、もう便意は限界を越え、肛門から液が漏れ始めている。本来なら便器での排泄まで想定していれば、タオルケットなどを下半身に掛け、排泄を隠すのだが、今回は、こっそりと処置室に入り込んで、秘密に処置をしたのだし、排泄はトイレだと思っていたので、準備もしていない。

挿しこみ便器を取り出すだけで、精一杯だったのだ。

芽衣は、大きく股を開き、秘所も肛門も関谷の眼に晒されながら、崩壊の時を迎えた。

肛門からは、注入された浣腸液と一緒に、コロコロとした糞塊が押し出されてくる。

石ころのような硬い便が続いて、大量の軟便が流れ出す。

関谷は、その光景に目を奪われているが、ふと気づき、慌てて芽衣に背を向ける。

もちろん、芽衣は顔を手で覆っているから、関谷に見られていたことにも気づかない。

やがて芽衣の腸の中からの流れも収まり、ヒクヒクと息づいていた肛門も落ち着きを取り戻した。しかし芽衣の股間には、便を受け止めた挿しこみ便器があり、自分では身動きも出来ない状態だ。顔から手を離れた芽衣は、背を向けている関谷に向かって声をかける。

「関谷くん、もう済んだから。このままじゃ動けないから、お願い。」

関谷は、その言葉で振り返り、なるべく芽衣の顔や秘所などを見ないようにしながら、片づけを始める。

便が山盛りになっている便器を脇に置き、いつもの排泄介助の通りに、肛門をペーパーで拭き、さらに清拭用タオルで、股間全体をきれいにする。

芽衣は、恥ずかしさでまた顔を覆ってしまいが、覚悟を決め、関谷にされるがままになっている。

関谷が、便器の中身を、向かい側のトイレに捨てに行き、便器をきれいにして戻って来るまでの間に、芽衣は起き上がり、服を整え、普段の顔に戻る。

だが心の中は、今までここで起こった事を受け止められず、動揺したままだ。

戻って来た関谷も、頭の中で様々なシーンが渦巻いているが、それを芽衣に悟られないように、平静を装う。

「もう、落ち着きましたか？」

「うん、ありがとうございます。もう大丈夫だと思う。」

「処置後には、もう終わったと思っても、お漏らししちゃうこともありますから、気を付けた方が良いでしょう。」

「そうね、もう一度トイレに行ってから帰ることにする。ねえ、今晚の事は秘密にしてね。」

「もちろんですよ。看護師の倫理としても他言はしませんし、森川さんの同僚としても、こんな処置をしてあげたなんて、言えませんからね。」

「本当に、今日はありがとう。」

そう告げると、芽衣は関谷を残して、処置室を後にした。

それからの数日。芽衣は関谷の事を意識してしまい、ついつい関谷の行動などを目で追うようにな

ってしまった。

良く観察してみると、関谷祐一は看護師としてもしつかりしていて、周囲の人間や患者からも好かれ、なかなかの好青年だと、改めて認識する。

顔だちも、芽衣の好みに近い。

へなんで、こんなに関谷くんのことを意識しちゃうんだろ。やっぱり浣腸なんかされて、排泄の介助までされちゃったんだし、お尻の穴もアソコも見られちゃったからかな…

芽衣は、自分の気持ちを持って余ってしまった。

そして二人共、翌日は勤務が休みという日に、関谷を誘ってみることにした。

先日のお礼という口実で、軽く飲みながら食事をして、話も弾んだので、その後もうちよつと飲みなおそうという話になり、芽衣の部屋に誘った。

もちろん、そのつもりでお酒も肴も準備してある。

それどころか、芽衣は何かがあつても大丈夫なように、勝負下着も着けている。

二人で部屋で落ち着いてグラスを重ね、程々に酔いが回った頃に関谷が改まって芽衣に向き直る。

「芽衣さん。お願いがあるんです。」

「なにかな?」

「僕と付き合ってくださいませんか。」

芽衣も、こんな流れで関谷の方からその言葉が出たのが嬉しく、心の中でガッツポーズを作る。

「どうして? 私で良いの?」

関谷の真意を確かめようと、さらに念を押す。

「この前芽衣さんに処置をしてから、あの時の事が忘れられなくて。看護師として失格かもしれないけど、可愛いお尻や見ちゃいけないアソコのことばかり、頭に浮かんでくるんです。あの時の恥じらう様子も、すごくキュートで、忘れられないんです。」

「良いわよ。私で良ければ。付き合ってみようか。もう、恥ずかしいところも見られちゃったしね。」

「ありがとう、嬉しいな。きつと幸せにしますね。」

「なんだかプロポーズのセリフみたいね。」

「そりゃあ、付き合うって、基本的に一生一緒に居るつもりで始めるものでしょう。」
そう言っつて、関谷は微笑む。

二人の距離はさらに近くなつて、芽衣は関谷に抱きしめられる。

へ嬉しい。でも、公認の仲になつても二人の馴れ初めは言えないよね。職場の処置室で浣腸されたのがきつかけだなんて…」

関谷は、芽衣を抱きしめながら、耳元でささやく。

「ずっと仲良しでいようね。」

「うん。ずっと一緒に居たいよね。」

さらに関谷はこんなことも芽衣にささやく。

「それで… また浣腸が必要になつたら、僕にやらせてね。」

「そんなの恥ずかしいよ。」

そう答えながらも芽衣は、やつてもらつても良いかな、などと思つてしまふ。

へそう言えば、由香も旦那さんに浣腸されているつて言つてたつて。どうして男の人つて、女が恥ずかしがるようなことをしたがるんだらう？ 恥ずかしがるのを見るのが嬉しいのかな？」

抱きしめられながら、芽衣はそんな事を取りとめもなく考えていた。

